国定市長に全国制覇を報告

全国高校総体山岳

県央工業山岳部 市長に大会冊子と記念のハンカチ

市長に優勝を報告する選手たち

全国高等学校総合体育大会の登山大会で初の全国制覇を達成した三条市の新潟県央工業高校の山岳部の石川恵子監督と吉田光二顧問、選手四人が二十四日午前九時五十分に三条市役所を訪れ、職員の歓迎と祝福を受け、国定勇人市長に優勝を報告した。

県央工業からは山岳部の監督、顧問、選手のほかに、笹川民雄校長、同窓会の川﨑國雄会長、梨本正實常任委員長も同行し、午前九時五十分に一行が市役所正面玄関に整列すると、待ち構えていた職員たちがクラッカーを鳴らし、大きな拍手と「おめでとうございます」の言葉で優勝を祝った。

一行は拍手のなか、市役所三階の第一会議室に入り、国定市長に優勝報告を行った。

登山競技の男子（A隊）には四十四校が出場。開催県の新潟県からは県大会優勝の新潟県央工業高校と長岡大手高校が出場した。

県央工業山岳部は三年生で新潟開催の大会に臨み、一年生の入部時からことしのインターハイでの全国制覇をめざしてきたCL（チーフリーダー）の高橋将汰選手、SL（サブリーダー）の波塚崇宏選手、佐藤汰紀選手、藤田一馬選手の四人が出場した。

大会は七日に湯沢町の湯沢カルチャーセンターで開会式を行い、苗場プリンスホテルに移動してホテル前の幕営地でテント泊。翌八日、男子のA隊は平標山（標高一、九八三・七㍍）に登り、再び苗場プリンス前でテント泊。九日は祓川から神楽ケ峰（一、〇二九・六㍍）、苗場山（一、一四五・三㍍）を登り、田代スキー場へと下りるコースを縦走して苗場プリンス前で幕営。十日は三国峠から三国山（一、六三六・四㍍）を経て平標山の家を経由して下山するコースを歩き、宿舎で一泊し、最終日の十一日、湯沢カルチャーセンターでの閉会式で終了した。

大会期間中、選手たちは常に審査を受けている状態で、山中での歩行、体力、装備、テントの設営や撤収、炊事、マナーのほかに、気象や自然観察、記録・計画、救急などの各筆記テストや天気図、登山ルートの読図などのテストをクリアしなくてはならず、その総合成績で順位を争った。

高橋選手は「何度も登ってきた新潟の山に全国の皆さんから来てもらい、登ることができた。他校の皆さんもとても明るく、楽しく山を登ることができた」と笑顔で報告し、市長に大会報告の冊子と、大会記念のハンカチをプレゼントした。

市長からは石川監督に花束、そして監督と選手全員に、今大会のポスターに市長の直筆メッセージを入れたものをプレゼントした。

市長は「私の出た学校にも山岳部がありましたが、何をやっているのか聞けずに終わった。山岳部ってなんだかえたいの知れないところがあって、疑問のまま四十歳になってしまった」と言って選手たちを笑わせ、大会中の採点方法などを詳しく説明を受けた。

大会中に行われる自然観察などのテスト問題を見せられても、「う～ん、一問も分からない。よく、こんな問題に答えられるね」と驚き、天気図のテストでも「これってラジオを聴いて天気図を作るんですよね。中学生のころにやった記憶があるが、県央工業チームの作成した天気図はプロが作る「模範天気図」に匹敵するできばえと大絶賛を押されたとの話に、「素晴らしい才能だ」としきりに感心していた。

しかも、準優勝校は広島県を代表する超進学校の修道高校で、それを抜いての優勝にも「あの修道にテストでも勝ったんですか。それはすごい!!」と選手たちをたたえた。

市長は選手たちが大会で背負ったメーンザックを担がせてもらったり、装備品を見たり、大会中に自炊する食事のメニュー表を見せてもらうなど、二十分ほど歓談し、選手から金メダルを借りて首に下げ、「重みがありますね。本当によくやってくれた」と改めて選手たちの活躍を称賛した。

大会で使ったザックの重さを体験する国定市長

市長を囲んでの記念撮影

大会のメーンザック担いで

装備や食事メニュー表見たり

テスト問題に『う～ん』